

串小学校 学校研究

1. 研究の概要

(1) 研究主題

研究主題 「自立した学習者の育成」

(2) 主題設定の理由

本校では、過去2年間、小松市の指定を受け、研究主題「語り合い、学びが深まる授業づくり～他者と協働した探究的な学びをめざして～」をもとに、総合的な学習の時間（以下、総合と表記）の授業研究を中心に学校研究に取り組んできた。昨年度、研究発表会を行い、2年間の取組を小松市全体に発信することができた。これらのことから、一定の成果をあげることができたと考えている。

【教員側から見たこれまでの研究の成果】

本研究における成果は、研究紀要にまとめた通りであるが、これからの学校研究を見直す際、教員側から出された主な成果は以下の3つであった。

①単元構成の工夫

「探究のサイクル」を繰り返す単元構成、つまり、探究的な学びを生み出す単元構成について理解を深め、構成を考え実践することができた。

②「主体的・対話的で深い学び」に向けての指導の工夫

思考ツールやICTを積極的に活用するなど、授業における指導の工夫について理解を深め、効果的に取り入れることができた。

③カリキュラムマネジメントの工夫

教科、領域等を横断的に見渡す「カリキュラムマップ」や「学びの地図」を作成する中で、有機的なつながりを生み出す指導の在り方について理解を深めることができた。

このような成果にあるように、教員の指導力向上が図られたことで、研究主題の「語り合い、学びが深まる授業づくり」が具現化し、「他者と協働した探究的な学び」が深まったと考えている。

【次なる指導力向上に向けた課題と研究への意欲】

しかし、これまでの研究を通して、課題も明らかになった。「カリキュラムマップ」や「学びの地図」の作成を通して、教科等でつけた力を総合で活用するという関係を実感することができた一方、各教科等でつけなければならない資質・能力が十分育成されていないのではないかと課題も見えてきた。教育活動全体を横断的に見渡し、つながりを自覚したことで、有機的につなげるための指導の充実、具体的には、教科の授業を改善する必要があると感じるようになったわけである。「探究的な学び」を支える「基本的な資質・能力（つぶ）」は、教科等で十分に育成しなくてはならない。その一つ一つの「つぶ」の充実が図れないと、その「つぶ」を選択したり組み合わせたりすること、つまり活用することは難しい、た

とえ、活用できたとしてもその学びは「浅い学び」のとどまってしまうことが明らかになった。

そこで、今年度は、児童の「探究的な学び」を充実させるために、今一度、教科指導の充実に重点をおくこととした。若手を中心とした教員から、「教科の指導力をあげたい」「個別最適な学び、協働的な学びを考えた教科指導の在り方についても知りたい」という声も多く聞かれたことも、教科指導にシフトした要因でもある。

【見えてきた児童の課題】

さらに、児童側の課題について話し合ってみると、大きく以下のような意見が出された。

①学習者として自立できていない。

教員に言われたことはできるが、自分から学ぶという意欲に欠けるところがある。自分でどのように学べばよいのかわからない児童が多い。つまり、自分に合った学びを自己調整して学んでいる児童が少ない。

②自己の考えの形成→表出に課題がある。

自分の考え自体、しっかり持てていない児童が多い。形成した考え自体も、道徳的な認識に課題があったり、浅い考えであったりすることが多い。また、考えを持っていても伝え方がわからずうまく伝えられない児童もいる。間違ふことや他者からどう見られるかという不安から、考えを伝えることに消極的な児童もいる。

これらの課題は、本校だけではなく、日本の児童・生徒に共通する課題であるともいえる。令和3年に出された答申『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して』（以後、答申と記す）の中にも、「学習意欲の低下」、「学習者として自立できていない状況があること」、「正解主義や同調圧力への偏りが見受けられること」などが課題として挙げられており、本校の課題とも共通している。

【来年度の研究の方向性】

授業研究の教科については、教員のベクトルをそろえるため、教科を絞ることとした。教科を絞る際、まず、重要視したことは、「自己の考えの形成→表出に課題がある」という児童の実態である。(図1参照)

児童が考えを表出できない理由には、大きく2つあると考える。一つは、「考えをもっているでも出し方がわからない」、もう一つは、「考え自体がない、もしくは浅い」ということである。ないものは出せない。そこで、まずは、児童の考えをもたせることが必要になってくる。考えや思いを持つために何が必要か。まず、必要なのは、感動したり、心が動いたりする豊かな体験であると考え。そして、次に、大切なのは、その体験をどのような価値観で捉えるかということではないかと考えた。同じ体験をしたからと言って、同じ考えをもつとは限らない。その捉えは、違って当然であるが、あってはいけない違いもある。例えば、その学びが、「命などどうなってもいい」、「協力など必要ない」というような考えであることは適切でない。つまり、道徳性において適切ではない考え方が形成されることは避けたい。そのためには、体験することで豊かな考えが形成されるような教育が展開されるように大切である。体験をどのように見つめ、何を学ぶのか……。そのような意味から、豊かな体験から豊かな学びが生み出されるには、道徳性の育ちが根底にあると考えた。確かな道徳的心情、判断力及び態度が育つことで、体験からの学びは深くなり、形成される思いや考えも深くなる。以上のような経緯から、図1のように、これらの資質、

能力の育成を担う中心は道徳科と道徳科を要とした道徳教育であると捉え、研究教科の一つに決めた。

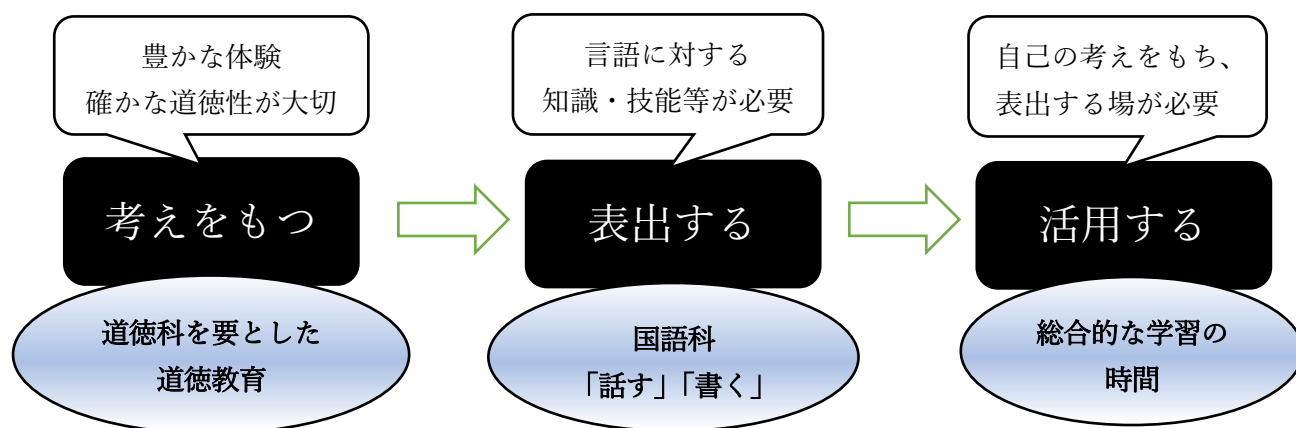
次に、必要なのは、「考えをもっていても出し方がわからない」という児童への対応である。この場合、必要になってくるのは、アウトプットするための言語に対する理解や言語技術等である。適切な語彙や技術について学び、それを思考、判断し、表現していくことが必要になってくる。これらの資質、能力の育成を担う中心は、国語科（特に、話す、書く）であると捉え、国語科も研究教科とすることに決めた。

さらに、道徳性や国語科で学んだ知識・技能等を活用する場があれば、より確かな力になっていくと言える。自由自在に学んだ力を活用する場があることで、本当の意味での生きて働く力になる。活用、探究的な学びの中心は、総合的な学習の時間である。これまでの研究の成果をもとに、単元構成に絞り研究していくこととした。

以上のことから、授業研究の教科を国語科、道徳科、総合的な学習の時間とした。

図1

児童の課題：自己の考えの形成→表出



一つ目の課題である「学習者として自立できていない」については、以下の2点に留意し、課題解決にあたることとした。

- ①児童一人一人が、見通しをもち自己調整して学べるような単元を構想する。教師主体ではなく、「学び方」に重点を置いた指導、できるだけ自由な形で自己調整して学べる指導を重視し、自立した学習への素地を作る。その際、ICTを効果的に活用する。
- ②学びを主体的に活用する「探究的な学び」の場を充実させる。
「カリキュラムマップ」、「学びの地図」の作成により、全ての教育活動を横断的に把握する。その上で、有機的なつながりを考えたり、効果的な単元を構想したりすることで、自己の学びを主体的に活用できる場を増やす。

①については、今年度は、国語科を中心に研究を進める。道徳科は単元がないため、1時間の道徳の授業づくり、そして、豊かな体験との有機的なつながりを考えた道徳教育の充実に重点をおいて進める。総合においては、②にある有機的なつながりを考えた単元構想に絞って研究を進めることとする。

【研究主題の変更】

ここまで、昨年度までの研究主題「語り合い、学びが深まる授業づくり～他者と協働した探究的な学びをめざして～」をめざした実践について振り返ってみた。先にも述べたように、一定の成果を挙げたことや昨年度、答申が出され、新しい方向性が示されたこと等を踏まえ、より今日的な課題に応じるべく、研究主題を変更することとした。教員、児童の実態、そして、今日的な課題、時代の背景等を鑑み、新しい研究主題を「自立した学習者の育成」とすることとした。

【主題設定の理由】

現代は、社会の在り方が劇的に変わる society5.0 時代、また、予測困難な時代であると言われている。学校で習得した知識や技能は、時間が経つと使えなくなってしまう可能性が高く、知識や技能は常に生産されており、新たに学習しないと、仕事や生活に支障をきたす状況にあるとあってよい。生涯学習の必要性は、以前から学習指導要領等でも述べられてきているが、今、目の前にいる児童がこれから生き抜く時代は、これまで以上に、生涯にわたって学習し続けなければならない社会であるといえる。

生涯に渡って学び続ける人間を育てるためには、どのような力が必要なのか。生涯学習は、自らの意思で取り組む学習であり、義務や強制という性格の学習ではない。言うまでもなく、自らの意思で取り組み、自分で学びを進める「自立した学習」への育ちが必要になってくる。その素地はどこで培うか・・・、それは言うまでもなく、学校教育の中である。つまり、生涯にわかって学び続ける人間を育てるためには、学校教育において、学ぶ意欲と態度を身に付けた「自立した学習者」を育てることが重要となってくるといえる。学校や教員からの指示、発信がないと、何をしてもよいのか分からず学びを止めてしまうようでは、これからの時代を切り拓いてはいけぬ。これからは、これまで以上に、「学ぶ意欲というエンジンを持ち、学び方を含めた学ぶ態度を身に付け、自分で自分の学びを自己調整していける児童」を育てることが重要になってくる。本校では、そのような児童を「自立した学習者」と定義づけ、研究主題を「自立した学習者の育成」と設定した。

「自立した学習者」に育てば、結果として、各教科や領域で求められている資質・能力も自ずと身に付くと考える。そして、そのことが、学習指導要領が求めている、「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てること」につながると考えている。

答申には、「全ての子供たちの可能性を引き出すためには、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実させる大切である」ということが示された。『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実させる指導の在り方を探ることも来年度の研究の大きな柱とし、「自立した学習者の育成」に努めていきたい。

(3) 研究内容

来年度は、本研究主題設定の初年度ということもあり、まずは、以下の点において、具体的なシステムを探る1年になると考えている。試行錯誤するかもしれないが、授業実践を積み重ねながら、本校としての具手的な実践方法を確立したい。

①個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、授業の改善を図る。(国語科を中心に)

→個別最適な学びと協働的な学びのベストバランスを意識し、二つを一体的に充実させる授業方法を探る。

→個別最適な学びにおいては、単元全体を見通し、自己調整して学べるような単元構想について探る。「学び方」に重点を置いた指導の在り方について探る。

→協働的な学びにおいては、自己調整して学ぶ際の協働的な学びの効果的な取り入れ方について探る。

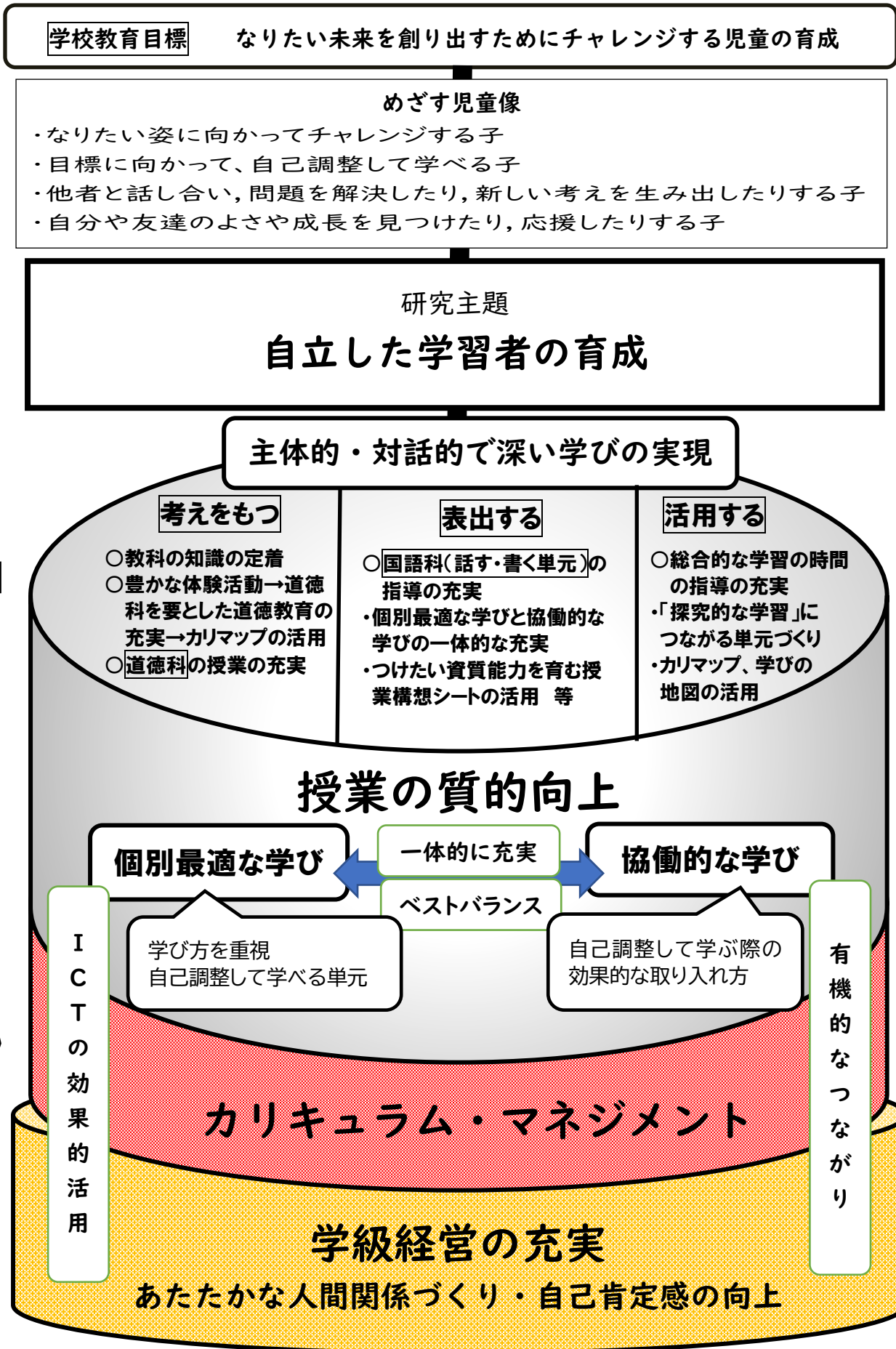
→ICTの効果的な活用方法について探る。

②確かな道徳性を育むために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、授業改善を図る。(道徳科を中心に)カリマップ等を活用し、道徳科を要とした道徳教育を図る。

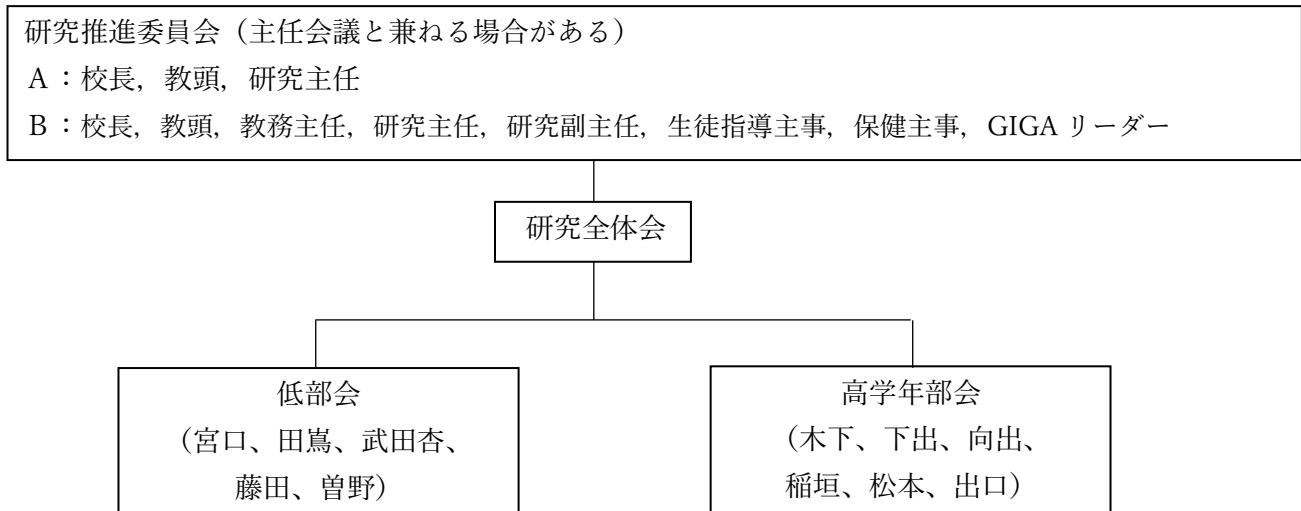
③教科と総合の効果的な関連をもとに、「探究的な学び」の実現に向けた単元を構想する。

「カリキュラムマップ」、「学びの地図」の作成により、全ての教育活動を横断的に把握する。その上で、有機的なつながりを考えたり、効果的な単元を構想したりすることで、主体的に「学びが活用できる場」を生み出す。

(4) 研究構想図



(5) 研究組織



○研究推進委員会

- ・研究推進のための原案作り（理論作り，研修会の企画など）や研究の方向や進め方を提案し，各部会の連携を図りながら実践を進める。内容に応じてA，B会を設定する。
- ・教育委員会等との連絡・調整を行う。

○研究全体会

- ・全体協議の場で，研究の進め方について共通理解を図り，研究の方向性を決定する。
- ・模擬授業及び指導案検討，授業整理会を行う。
- ・整理会では，次の研究授業までに全体で共通実践する内容を設定し取り組む。

○各部会（低学年・中学年・高学年）

- ・教材研究，児童の実態把握，指導案の検討をする。
- ・研究の重点を具現化するための工夫を考え，実践状況を交流し合う。
- ・研究授業後，授業者は，フィードバックを作成する→全体で共有する。

(6) 研究方法

- ① 研究推進委員会が中心となり，各部会との連携を図りながら実践を進める。
- ② 全体会・研修会を開き，共通理解を図りながら進めていく。
- ③ 原則として，一人1研究授業（全体研究授業または部会授業）を行い，実践を深めていく。
- ④ 授業前に「模擬授業・指導案検討会」，授業後に「整理会」を行う。
- ⑤ 日頃から授業を見合う機会を持ち，日々研鑽する。
- ⑥ 教材研究の時間を全体で設定し，意見交流しながら教材研究を進める。
- ⑦ 他校視察を行い，指導に生かしていく。
- ⑧ 講師を招聘しての研修会を適宜行う。

(7) 研究計画

| | 月 | 内 容 |
|------|----|---|
| 一学期 | 4 | 研究の基本計画の決定，重点・掲示物の共通理解 教員と児童の共通理解を図る授業集会 |
| | 5 | 授業目標の提示 5年指導案検討会 指導案検討会 校内研修会（ ） |
| | 6 | 国語科研究授業5年1組（向出） 道徳科研究授業（ ） |
| | 7 | 1学期の取り組みについての振り返り |
| 夏季休業 | 8 | 校内研修会（ ） 2学期の方向性について 2学期研究授業の指導案検討・模擬授業 等 |
| 二学期 | 9 | 道徳科研究授業（ ） |
| | 10 | 国語科研究授業（ ）、国語科研究授業（ ） |
| | 11 | 国語科研究授業（ ） |
| | 12 | 2学期の取り組みについての振り返り，今年度の研究の成果と課題 |
| 三学期 | 1 | 今年度の振り返り，研究のまとめ |
| | 2 | 今年度の総括及び次年度の方向性について |
| | 3 | 次年度の研究準備 |